ラーメン当番

インスタントラーメンは昭和三十年代の半ば頃に発明され、昭和四十年代には爆発的に生産量を伸ばしていった食品である。又このラーメンの歴史は私の受験勉強時代、浪人時代、そして花の大学生時代の歴史とぴったりと重複するのである。

この間に一体何食分のラーメンを食べたのであろうか想像もつかない。メーカーも地方の小さな会社まで含めると乱立気味であったが、次第に淘汰されて現在に至っている。戦後経済史の中の一ページを見る思いがすると言っても過言でないかもしれない。

学生時代の群馬にも地方のメーカーが学生寮の隣町にあったが、「味一番」の名で知られていた。この商品は一袋三十円が標準であった時代にわずか十円であったため、学生の好評を博していた。しかしながらこのラーメン、三回連続して食べると下痢をする者が出るところから、誰言うとなく「ゲリ一番」の悪名も持っていた。確か私が二年生になった頃には店頭で見かけなくなったので、お気の毒だが倒産したのかもしれない。

学生寮ではラーメン当番なるものがあって、毎晩、夜食にラーメン作りをさせられ

る係りで一年生が担当するものと決まっていた。上級生は金を出し合ってラーメンを買ってくれるものだから労働力を提供するだけで一年生は空腹を満たす事が出来るという結構な仕掛けなのだが、そうも問屋が卸さない。

大きな鍋にいっぱいのラーメンを炊事室で作って自室へ運ぶと大抵十人くらいの上級生が手に手に湯呑やらコップを持って待っている。「どうぞ」と部屋の中央に鍋を置くやいなやワッと早い者勝ちでラーメンを取りに来るものだから作った本人は当然割を食う。おまけに茶碗もコップも箸もないので、それらを探している間に殆どのラーメンがなくなり、お汁だけが残ることになる。誠に情けない思いをし、空腹感も倍になったものだった。

だから一年生も負けてはいない。次の機会には自分の茶碗と箸を部屋のどこかに隠しておいて戦列に加われば少しは生存競争に勝ち残ったケースもあったが、下級生の遠慮からかいつも満腹になることはなかった。

そうこうしている間に、私にあるアイデアが閃いた。炊事室でラーメンを作るのは二人の当番だけである。ラーメンを作りながら食ってしまえば部屋に帰って慌てる事もない。

それからと言うものはラーメン当番が楽しくて仕方が無かった。十人前のラーメンを一度に作るので、一人前くらい減ったところで目立ちもしないわけである。

しかし悪事は長く続かなかった。たまたま様子を見に来た先輩にバレテしまい、翌日から粉末スープを取り上げられた状態でラーメンを作らされることになってしまった。味のついていない即席ラーメンなど食べられる代物ではない。部屋まで持っていくと先輩がおもむろにスープの素を入れ、味付けが終わってからヨーイドンとなる。結局もとの木阿弥となってしまった。

生存競争とは知恵と知恵のぶつかり合いだとその時つくづく感じた。